

長い長い
ピンクのマフラー

greentea0117

長い長いピンクのマフラー

私の家にはお手伝いさんがいて、いつも何かしら世話を焼いてくれました。母は専業主婦でしたが動くのが嫌いな人で、なにもかもお手伝いさんにまかせっきり。気が向いたときにはちょこっと料理を手伝ったり、洗濯をしたりしていました。

このお手伝いは菊枝さんという名前でした。菊枝さんは母とは対照的に、いつも忙しく立ち働いていました。母と菊枝さんは気が合うらしくいつも何かしゃべっていました。

「さっちゃん、そんな大きな口でものを食べちゃだめ」

と注意するのは菊枝さんで、

「菊枝さんがいないうちに、いただいたお菓子、食べちゃいましょう」

と言うのは母でした。母親が二人いるような感じでしたが、私は菊枝さんが暖かく整えた家で、二人のにぎやかなおしゃべりの中育ちました。

菊枝さんは編み物をするのが趣味でした。何もすることが無くなると、どこからともなく編み棒と毛糸を取り出して、何かを編んでいました。菊枝さんがじっとしているところを見たことが無いくらいです。編み棒と毛糸と指がうねうねと複雑に動くのがおもしろく、私はよく菊枝さんの脇にすわり見していました。ある日私は菊枝さんに言いました。

「マフラーの編み方を教えてほしいんだけど」

何気なく言ったつもりでしたが、体はぎこちなく菊枝さんの目を見る事ができません。テレビを見ていた母が私を見て、

「好きな人ができたのね」

と、こともなげに言いました。

「普通そう言うことを察しても口にはしないよ」

私は言いましたが、母はふふと笑い、またテレビを見ています。

「あらまああらまあ」

菊枝さんは驚いていました。菊枝さんの中ではいつまでも私は、手のかかる三歳児のままなのです。驚きが収まると、菊枝さんは少ししゃんと姿勢を正しました。

「それで、どんなのがいいかしら？ やっぱ青とか緑とか、そういう毛糸がいいのかしら」

「うーん、そういうありきたりのじゃなくて」

私は菊枝さんには聞こえて、母には聞こえない声のボリュームで言いました。

「ピンクがいいと思う」

「ピンク？」

菊枝さんは素っ頓狂な声を出しました。けれど母には聞こえないようなボリュームに抑えてくれました。

「ピンク？ほんとに？男の子にピンク？」

「うん」

私はもじもじとしました。

「ピンクがいいと思う」

そこで私と菊枝さんは、菊枝さん行きつけの毛糸屋さんに行きました。

「ピンクって言っても、いろいろあるけど」

「暖かくてかわいいピンクがいい」

「ねえはっきり聞くけど」

菊枝さんは言いました。

「男の子にあげるのよね？」

「そう」

私はもうもじもじとはせず、毛糸を物色しました。そして薄いピンク色のふわふわとした毛糸を見つけました。

「あらまあこれはカシミアよ。とてもあったかくて軽いのよ。これを、そうねえ、マフラーだったら六玉あれば大丈夫かしらね」

私は菊枝さんに教えてもらいながら、熱心にマフラーを編みました。本当はもっと凝ったマフラーにしたかった。菊枝さんが編むような模様編みを全部ピンクのマフラーに入れたかった。けれど編み物などしたことのない私に菊枝さんが教えてくれたのは、一番簡単なメリヤス編みでした。私は長い長いマフラーにしたくて、延々と編んでいました。六玉では足りなくて、もう六玉買ってきてもらいました。出来上がったマフラーは、長すぎて、首に何重にも巻かなくてはなりません。でも暖かいことは間違いなしです。

私は長い長いマフラーを袋にぎゅうぎゅうと詰めました。

「喜んでもらえるといいわね」

菊枝さんは少し心配そう。

「大丈夫。喜んでもらえる。自信があるの」

私は言いました。

とは言え、あげるときはやっぱり緊張しました。バレンタインデーでもなければ誕生日でもなく、ただ寒い冬の日というだけだったのです。私はその人を放課後、屋上に呼び出しました。

「あのね、これ、マフラー」

そう言って、袋をずいと前に出しました。

「マフラー？」

その人は袋からマフラーを取り出しました。取り出しても取り出してもまだあります。しまい
にその人は笑い出しました。

「何このマフラー、エンドレス？」

私も笑いました。私たちは友達になりました。青や緑なんかじゃなく、ピンクのマフラーにして、よかったと思いました。